

文化藝術懇話会 (63)

時： 2019-02-28 (木) 18.00-20.00

所： 淡路町ワテラス・レジデンス 2011 号 (パーティ R)

人： 古田武彦 九州王朝ほか

書名：古田武彦 古代史の十字路 万葉批判

(1971 邪馬台国は無かった、1973 失われた九州王朝、1975 盗まれた神話など)

701 奈良王朝以前に、57-700 九州王朝があったと。

57-700 年まで：九州王朝

701 以降：奈良王朝 (大宝律令)

2001 古代史の十字路 万葉批判

第一章 疑いの扉「天の原」の歌 阿倍仲麻呂 (698-770) 作 717 遣唐使

- ・万葉集も古事記、日本書紀と同じく、701 以降 (大宝律令) の奈良王朝から生み出された一連の文献。万葉集も聖域ではない。

- ・天の原ふりさけ見れば春日なる 三笠の山に出でし月かも 古今集 9-406

294m の低い三笠山から月が出るとは言い難い

福岡県の春日市にある三笠山 かすがなる三笠やま (宝満山) 869m

前書き、後書きは、いったん保留する。そして、和歌そのものを感じ取る

第二章 失われた「籠 (こ) もよ」の歌 (21) 雄略天皇の御製？

籠 (こ) もよ み籠持ち掘串もよ み掘串持ち この岳 (をか) に菜摘ます児 家聞かな 告 (の) らさね (巻 1-1)

- ・告 (原本) → 吉 (江戸時代の版本、宣長／玉の小琴)

- ・真淵／万葉考 万葉集は誤字が多い。意味の通じない箇所 (写し間違い) を正すとの大義名分で、原文を勝手に改定

- ・(21) 雄略天皇ではない。次の (34) 舒明天皇まで十二代が欠落。

(22) (23) ... (33) 歌を作らなかった？

雄略天皇だけが作った？ 変だ？

関連地名 京都府宮津市の籠 (この) 神社

第三章 豊後なる「天の香具山」の歌 (34) 舒明天皇の御製？ 場所飛鳥でなく別府

- ・大和には 群山あれど とりよろふ 天の香久山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし国そ 蜻蛉 (あきづ) 島 大和 (八間跡) の国は (巻 1-2)

大和盆地で海が見えるか？ 香具山の脇、埴安池は 34m 四方の池で、海ではない

大和の天香久山、低い山で、周囲の山に対して「とりよろって」いない。

大分 (豊後) 鶴見岳、1375m、別府市内に天間 (あま) 区。海人 (あま)

「かぐ」は、「か」(神聖な) + 「く」(奇 (く) し) 鶴見岳の古名が「かぐ山」

869 大爆発 山頂に三つの温泉地があった「火のかぐつちの命」

蜻嶋 (あきづしま) : 安岐津島、国東 (くにさき) 半島、別府湾の北端部。

八間跡 (はまと) : 浜跡。別府湾岸の右隅に浜脇温泉。この奥 (山沿い) に「登り立て」字地名

第四章 いずこなる「春すぎて」の歌 (41) 持統天皇御製

春過ぎて 夏来るらし 白妙の 衣乾したり 天香久山 (巻 1-28)

藤原宮か天香久山まで 1km 春が終わって夏が来た 驚き

天香久山 雨乞いの丘 小さな祠で、宮司や巫女の生活の場ではない

別府（大分）の鶴見岳 火男（ほお）社、火売（ひめ）社の二社がある 天（海人）の香具山
*山中に入って、初夏の到来を発見した名歌だったのではないかと。

第五章 あやまれる「高山」の歌

香具*山は畝傍雄々しと 耳梨と 相争ひき 神代より 斯くあるらし 古昔（いにしへ）も
然（しか）にあれこそ うつせみも 孀（つま）を あらそふらあしき（巻1-14）

*原文は高山 仙覚、契沖、真淵らの万葉学者は低い香具山を高山にあててきた。

高山を「かぐ（香具）やま」と読めない

全万葉集中、「高」字の全20例すべて「たか」の訓。

*一部から、全部を類推すると、単なる確率となる

*全部の類例を検証（帰納する）れば、推論の正当率は100%

第六章 天国（あまくに）の「香具山」をさかのぼる

別府湾の鶴見岳、本来、火（ほ）の香具山

古事記の「大倭」、「おほやまと」でなく「おほちくし」。倭=委、志賀島の金印（委奴、いど）
盗まれた神話で触れることが出来なかった場所

- 1 高天原
- 2 天安河
- 3 天の香山 別府の鶴見岳（1374m） 火山、鉾山、爆発と飛散、三日三晩の噴火
 - ・古事記そのものが、後代の手になる改竄（かいざん）
 - ・万葉集の和歌（朔、ツイタチ）は、古事記に別の形（月経）で転用されている。月経は誤り。
 - ・古事記の神話世界は対馬海流と別府湾の近辺

第七章 太宰府の「中皇命」の歌 なかつ すめら みこと

・倭、「やまと」でなく、本来「ちくし」

大國主神、胸形（むなかつ）の興津宮...

出雲から筑紫へ、対馬海流を溯（さかのぼ）る他はない。

名太子為利歌弥多弗（カミタフ）利 福岡市箱崎に上塔（カミタフ）字地名

隋書（ずいしよ）倭傳（たいでん） 多利思北孤（たりしほこ） 636（55巻）、656（30巻）

評（ひょう）と郡（ぐん） 木簡から「評」「郡」共に出土。公的書類は評→郡に書き直している
白村江（はくすきのえ） 唐は北朝系で、南朝を偽王朝とした

金印：漢委奴（イド）国王 *伊都＜古代の怡土（イト）、糸島＞

出雲から筑紫へ上る（海流）

倭国＝筑紫

短里（77m）、三国志

関門海峡近辺、先進文明圏

隋書、倭（タイ）伝

失われた九州王朝 *古田、まとめ、訂正

- 1 日出（い）する処の天子 多利思北孤（たりしほこ）は男。推古天皇ではありえない
- 2 多利思北孤は天子であるから、ナンバー2の聖徳太子ではありえない
- 3 タイ国の祭祀、火山の活写、阿蘇山は九州で、近畿ではない
- 4 隋使が飛鳥へ向かったなら、瀬戸内海、三輪山、大和三山、琵琶湖の描写があるはず
- 5 日本書紀の推古紀は唐（大唐と呼ぶ）に対する遣唐使だけで、遣隋使は存在しない
- 6 推古天皇、聖徳太子に多利思北孤の称号はない

- 7 太子を名づけて利と為す。歌弥多弗（かみたふ）、九州大学の福岡市箱崎に上塔（かみたふ）の字ある。
- 8 太宰府の地、「字、紫宸殿」、「字、大内裏跡」、中央奥に「大裏岡」がある。
- 9 都府楼跡、都督府楼跡の略。南朝・劉宋*の天子から任命された倭の五王の中心都城である。
*劉宋 東晋の武将・劉裕 南北朝 420-479 都は建康（南京）
- 10 博多に鴻臚館（こうろかん）
- 11 王の妻は、雞弥（きみ）と号す。後宮に女、六、七百人。福岡に女原（みょうばる）、筑後に女山（ぞやま）
- 12 邪摩堆（ヤヒタイ）、宮殿
- 13 倭（タイ） 奈良の飛鳥に、この国名はない。

旧唐書（くとうじょ）57（金印）-662（白村江）すべて、倭国
702以降、すべて日本国

- 1 中皇命（なかつ すめらみこと） 多利思北孤（たりしほこ）（-600-608-）の次代あたり
- 2 地名 中（那珂川の那珂）皇命 中珥（なか、方式の矢筈<やはづ>）
- 3 内野（題材府の奥にある地名）狩場として相応しい
- 4 朝廷（みかど）夕庭（きさき）
- 5 我が大王（舒明天皇）のお仕えする、筑紫の天子におかれてはの意
舒明天皇は、はるばる大和から、この太宰府に来て、筑紫の天子の好きな狩場へ行を共にされた
*九州王朝の天子に対する讃歌であった。*驚天動地

天子の長期航海（巻1-10、1-11、1-12、1-12 続）

- ・表記の訓（よみ） 中皇命（夫）と妻で、違っている。
- ・無敬語
- ・地名 阿胡根の浦（和歌山の野島付近？）小島（不明？） 英真（あご）湾、真珠の名産地 白玉（真珠）

（古田）中皇命（九州王朝の天子）の出発地は九州、長期航路として妥当 野島（淡路島北端）
小島（吉備の児島）、野島（明石海峡）（巻3-250、250 続、251）、紀の温泉（和歌山、白浜か）
明石大門（巻3-254）阿胡の浦（巻15-3610）

第八章 雷山（いかづちやま）の絶唱

- 1) 天雲の歌（人麿） 天皇、雷岳（いかづちのをか）に御遊（いでま）し時、柿本人麿...
前書き、後書き、第二次史料 皇（すめろぎ） 死せる王者 雷山（前原市、千如寺大悲王院、清賀上人*）

*清賀上人：寺伝によれば、成務天皇48年（148年）にインドの僧清賀上人によって開創
神が社に祀られている。 白村江の戦いで敗れ、民のいほりは、荒れ果ててしまった（人麿の感慨）
右、或本云、猷忍壁皇子也、其歌曰
王（きみ）神座者 雲隠 伊加土山口 宮敷座（巻3 雑歌、3-235）
・もうお亡くなりになって、死者となっていられっしゃいますから、この雲多き、雷山の山中に
葬られていられっしゃいます。雷山（いかづちやま）、筑前

2) 海鳴り*の歌

皇（おほきみ）は神にし坐（ま）せば真木の立つ荒山中に海を成すかも（巻3-241）
*海鳴り（福永晋三・伸子） 海鳴りがしたら、津波がくる 海鳴りとして死者の声を轟かす
*王朝、滅亡の予告

第九章 万葉集成立論

- 1) 評(ひょう)なき万葉集 *1951-1968 群評論争
 - 1 日本書紀は700以前の行政単位「評」を隠蔽した
中国の史書は、700以前：倭(ちくし)国(九州王朝)
701以降：日本国(奈良王朝)
 - 2 万葉集でも、評を郡へ書き換えている
 - 3 662(旧唐書、新唐書)白村江の歌、削除されている 663(日本書紀)
 - 4 序文の欠落
- 2) 貫之(870c-945c)・(つらゆき)の万葉論 古今集序文
 - 1 905.04-15 漢文序 *本来破棄されるべきものであったが保存されていた
905.04-18 仮名序
 - 2 人麿(660c-724c-)、赤人(?-736?) 比較論
三吉野の御船(みふね)の山に立つ雲は...(巻3-244) 奈良の吉野山でなく、肥前の三つの吉野
*吉野ヶ里、吉野川(高瀬川)、武雄の吉野。
 - 3 赤人が人麿より上。実ハ逆
 - 4 スサノオノミコト 歌謡発生の祖
 - 5 新仮名序 男女のあるところに歌あり... 歌謡淵源論
 - 6 スサノオノミコト→シタテルヒメ 時代順
貫之は雑型(シタテルヒメ)→定型スサノオノミコト *定型は後代
 - 7 皇(すめろぎ) 大王(おおきみ) 王(きみ) 吟詠、朗唱で七五調になる
 - 8 新仮名序 ならの御時(文武天皇)よりぞ... 文武天皇(673-686)
これより「さき」の哥をあつめてなむ 文武天皇よりさき、の意
万えうしふと、なづけられたりける
 - 9 *全万葉集でなく、巻一、巻二(196首)*の天皇を治世別に分類、編成 *正規の万葉集
ならのみかど、(51)平城天皇*(806-809)ではなく、(42)文武天皇(683-707)在位 397-707
*平城(へいぜい)天皇は、薬子(くすこ)の乱、悪名高い天皇 平安から平城(奈良)へ戻そうとした
720日本書紀、797続日本紀、延々と繋がっているように見せてきた。
しかし、683「万葉集撰進」記事、712「古事記撰進」記事は削除されている
 - 10 紫式部：日本紀、片はし論
中皇命(なかつ すめらの みこと)(-650s-)
若き醍醐天皇(885-930)は、貫之(870c-945c)の本音を書き切ることを許した
*あま(海人)、出雲の沖合、隠岐島に海人村(あまむら)

第十章 万葉集の深淵

特論 1

- 1 692 朱鳥(あかみ とり) 六壬申 日本紀*の証言 臣下冠位を脱ぎて、諫めた。
*現在の日本書紀ではない。九州年号の朱鳥と一致。
*日本書紀では、686 朱鳥元(天武丙戌)。明らかに別本。
中皇命(なかすめらみこと) 九州王朝の天子 (巻1-3、1-4、1-10、1-12、頭注歌)
*万葉集は九州王朝の存在なしに正解できない。
- 2 臣下は、農作の前行幸すべきではないと諫言した。三月六日、出発して、五月六日、伊勢の阿胡に到着。
持統天皇など近畿の天皇では矛盾。二ヶ月も掛からない。10日ほどで行けるはず。
持統天皇(645-702)の十二回も吉野行幸。
- 3 *筑紫の太宰府から吉備の小島(児島)、野島(明石海峡)、紀の温泉(白浜)、阿胡根(英虞湾)
これは662 また 663 白村江、以前
- 4 持統六年、日本書紀 三月六日出発した。到着の日時を削除。

- 5 九州王朝の史料が引用され、本文化されている。
人物：中皇命（九州王朝の天子）を近畿の持統天皇にすり替えている。
時代：白村江以前から白村江以後
部分的な手直し。日本書紀も、天武・持統紀あたりは信用できる？ 神功皇后紀、景行紀と同様、危ない
- 6 五月六日、到着。これを賞美にすり替えている。

特論 2 甘木（あまき）の人麿挽歌（巻 3-239、3-240）

- 1 人麿の歌 動物が這いつくばる これはオカシイ
- 2 天（あま）ゆく月... 原文：「天帰」月乎... 帰（る）→行（い）く 天帰（あまぎ） 天に帰る（挽歌）
- 3 天木（あまぎ）の月 紋章で天空の月ではない 貴人の哀れな惨状を思い浮かべ見ている。
麻氏良布（までらふ）神社の祭神、月夜見尊
雷山（いかずち）が舞台 糸島郡雷山（いかづちやま）
 - ・ 皇（すめらお）は神にしませば天雲の雷の上にいほらせるかも（3-235）
 - ・ 皇（すめらお）は神にしませば真木の立つ荒山道に海鳴りせすかも（3-241）

九州王朝の王者に対する追悼歌

- 1) 甘木の王者は狩りの途次、不慮の死をとげた。
- 2) その葬列は雷山へと向かった。九州王朝の神聖な墓域に葬られる
- 3) 人麿は、その葬列に加わっていて、天帰歌を作った。
- 4) 人麿は、天雲歌、海鳴り歌。白村江の後の惨たる民衆の姿を歌った。天子の責任を問う

特論 3 倭国別離の歌 阿部仲麻呂

- 1 天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも（古今集 9-406）
- 2 天の原 壱岐北端 巻 2-147 倭大後の歌？ではない
- 3 白村江の戦いへ出征する 吉武高木の陵墓に参拝し...博多湾の長垂（ながたれ）山（室見川河口）
- 4 百済は壊滅していた。陵墓の死せる王者の命は永遠である。仲麻呂は、この歌を知っていた。
- 5 716（霊亀 2）、仲麻呂は遣唐使の一員に加わっていた。仲麻呂は九州近辺の出身か。
宝満山（三笠山）の西麓、太宰府近傍

特論 4 菅原道真「新撰万葉集」序文の秘密

- 1 冒頭 夫れ万葉集は古歌の流なり... 万葉集の淵源（えんげん）は古歌。つまり万葉集は古歌ではない
- 2 道真の古歌は 701 以前の倭国（筑紫）時代の歌
- 3 万葉集の成立は、701 以降、日本国における成立
倭国時代の歌 古歌（勅撰集） 数十巻
日本国時代 万葉集 二十巻
- 4 其の要妙を装い...
- 5 ハコに韜（つつ）みて價を待つ。数十巻本を二十巻本に外装転換（書き換え）。
後代の評価を待ちたい
- 6 今人／錦を剪る 古人／素を織る
- 7 文武天皇（683-707）の時代における、万葉集巻 1、巻 2 の変修（へんしゅう）
- 8 倭歌／数首 漢詩／一首 古様式の定型
和歌／一首 漢詩／一首 新撰万葉集
- 9 893 寛平五載 前世の美を書き、而して後世の顎（おとがい）を解（と）かんと云うのみ
解（カイ）：文体の名。論弁類に属し、疑惑を弁じ、紛難を解くもの。論・説・議・弁
- 10 解顎（かいゐ）：お笑い草
- 11 筑紫 神社の門前、両石柱に五字、七字の漢字造文の歴史

補考 新万葉学の本質（第七章の論理性について）

- 1 701 以降／日本国
- 2 史料批判の分析
- 3 天皇、宇智の野に遊獵（みかり）したまふ時、中皇命（なかすめらのみこと）の...（巻1-3）
中皇命の歌（巻1-10、1-11、1-12、或頭云）
太宰府を出発し、吉備の児島、明石海峡、紀の温泉、英虞湾まで長期旅行→朱鳥二本紀（九州王朝、太宰府）
- 4 朝／みかど
- 5 夕／きさき
- 6 仮説の系 仮説は、検証を行う必要。
- 7 大王（おおきみ） 大王は天子ではない
- 8 宇智郡の野に当ててきた 太宰府に内野（うちの）狩場に相応しい
「中」皇命（なかすめらみこと）／なか、地名
- 9 とり撫でたまひ／中皇命（なかすめらみこと）（男）、い倚（よ）り立たしし／妻（つま）（女）
- 10 論理の進行
- 11 朝庭 夕庭 前書きは原則として第二史料。しかし、信用できるものもある。
- 12 相手の趣旨を矮小化、短絡化してはならない
相手の事実認識、事実調査以上の事実確認を用意する

後書きに代えて

- 「籠（こ）もよ」の歌（巻1-1） 宣長は玉の小琴で、告→吉 改竄
坐（いま）すを用いた人物、「押奈（あふな）戸手*」 *戸手（とて）
- ・「あふな」と呼ばれる土地の戸口の領域 地名表示 神自身 籠（この）神社
豊宇賀能賣（とようかのめ）、縄文以来の料理の女神
 - ・不定形（下照姫）は、古い原初歌謡 五世紀以前
 - ・定型（スサノオ）は、新しい、五七五定型。雄略天皇の御製とした
万葉集編者は疑わしい。
 - ・押奈（あふな）戸手に坐（いま）すという神が、籠（こ）の丘の野辺で呼びかけた相手の女神
は、他でもない、この「とようかめの神」自身だったのではないか。
すなわち、菜摘みは、膳厨の用意、職掌としての料理そのもののため
 - ・殷・周の古代中国と古代出雲の関連。弥生の土笛（陶埴、とうけん）は殷周の古楽器を継承。

酒井 雁高（がんこう） 学芸員 curator

浮世絵・酒井好古堂 <http://www.ukiyo-e.co.jp>

〔浮世絵学〕文化藝術懇話会 浮世絵鑑定家

100-0006 東京都千代田区有楽町 1-2-14

電話 03-3591-4678 Fax03-3591-4678

次回より日本古代史（古田武彦の実証、帰納100%証明による代表作著作）

- 1) 1971 邪馬台国は無かった、
- 2) 1973 失われた九州王朝、
- 3) 1975 盗まれた神話

*合わせて魏志倭人傳（三国志）ほか倭人傳集成 下記の国書刊行会本が最適

文庫本でも良いが、出来れば単行本を入手すると良い。古書で簡単に買うことができます。

訳註中国正史日本伝 石原博道 国書刊行会